

久木小学校区住民自治協議会・広報誌

住民協ひろば

第22号（準備会から通算第43号）

発行日 平成31年2月9日

発行所 逗子市久木2-1-1

久木小学校区住民自治協議会

発行人 田倉 由男

・・昭和・平成の時代を振り返り、新しい時代を考察する・・

31年1月度役員会

1月度役員会は休会となりましたので、記載事項はありません。

事務局からの連絡

1. 藤江博士からご寄付

ロボットと生活支援に関してご講演頂いた藤江 正克博士から¥10,000のご寄付を頂きました。

2. 12月度みんなの食堂の報告

12月14日（金）17:00~18:30、クリスマスメニューとしてオムレツご飯
参加者：129名（子ども70、大人42、スタッフ：17）、収支：収入¥24,900、食材支出：34,694
差引残高¥9,794のマイナス。他に講演者謝礼と

して¥5,000の支出あり。
今回の特徴は、オムレツプロの仕込み、全国自転車旅行の方の講演開催、コーヒー店出店等のイベントを併催したこと、多数の方にお断りしなければならなかったことです。

3. 逗子市商工会青年部、 久木中学校あきんど塾からご寄付

12月度みんなの食堂開催の際、標記の団体連名で、¥50,000のご寄付を頂きました。

昭和・平成の時代を振り返り

新しい時代を考察する

久木小学校区住民自治協議会
事務局長 鈴木 為之

はじめに

昭和、平成と時代が移り、そして新しい呼び名の次の時代を迎えようとしています。

振り返ってみるとそれぞれの時代に、時代の特徴があり取り組むべき課題がありました。

新しい時代の特徴と取り組むべき地域の課題は何かを、私なりに考えてみたいと思います。

結論から申し上げれば、「人生百年時代」、「少子高齢化」の言葉に代表される時代の特徴と取り組

むべきはそこから生じるもろもろの課題であり、行政や企業と並んで地域の役割が嘗てないほど重要になる時代ではないか。人生百年時代の当事者となる高齢世代の意識改革とパワーアップがカギを握るのではないかと考えています。

昭和・平成と、私の体験を軸に過去を振り返りながら、新しい時代の課題を考えてみたいと思います。

1. 昭和

過去を振り返ってみると、昭和・平成のそれぞれに等しく特長を持って生きて来たようです。一言でいえば、前半は昭和に生きた会社人間、後半は平成に生きる地域人間ということでしょうか。

昭和との関わりはといえば、二つに分けられましょう。前半の青春時代は、まさに戦争とその後始末の時代の中でと申しましょうか、空襲のサイレンの音と闇市の喧騒そして労働歌に囲まれて、あれよあれよと時代に流されて過ぎ去った感じでした。

後半の会社人間になってからは、一所懸命、まさに会社のためというフレーズの元、膨らんでいく経済の中で、気が付けば日本は「Japan as No1」と囃されていたということでしょうか。

不思議にこの時代の流行歌は覚えていません。一時代前の岡晴夫や霧島昇はよく覚えているが、裕次郎は覚えていないのです。仕事に没入して覚える気持ちがなかったのでしょう。当時の時代感覚では、仕事に追われたのではなく追いかけた時代感覚です。今よく言われる「ハラスメント」なる言葉はまだありませんでした。

この時代、今問題にされているいくつかの萌芽がありました。

この頃、当時当たり前であった終身雇用に風穴を開けることとして、定職に就かずに経験しながら適した仕事を選ぶという「フリーター」という選択肢が出始めました。当時を振り返ってみると、新鮮な発想であり好意的に受け止められていたと思います。確かに便利な職選びの方法ではあったが、これが平成の不況になったとたん、不幸なことに逆手に取られ派遣社員と非正規雇用者へと変わっていき、今の格差社会の一つの形となっ

てしまいました。

今一つは、中国から若者が入ってきたことです。今とは違って、稼ぐために何時間でもいいから働かせてくれと、休日もない労働を要求されました。日本で1年稼げば母国に帰って一生暮らせるという時代でした。当時ハングリーだった中国人のバイタリティーが、今の大国中国を生み出す原動力の一つとなったことでしょうし、又外国人の受入れ問題の萌芽だったと思います。

昭和前半の飢餓と喧騒の時代と対比して、昭和の後半は一転して上昇機運に乗った躍進・平和の時代でした。

2. 平成

平成になって事態は一変しました。この時代、二つに分かれるでしょう。前半は膨らんだ風船に穴が開いて萎んでいく時代で、後始末に追われた会社人間でした。まだ転職が当たり前にならなかった時代、「リストラ」という人員整理が会社人間を苦しめました。「窓際族」という言葉がはまりました。

バブルの後始末は、住専(住宅専門金融会社)や融資銀行の整理に及び、銀行の再編が始まったのも当時だったと思います。又就職氷河期、大量の非正規就労者や「ニート」と呼ばれる人達が生まれる時代でもありました。

やがて情報技術の発達(IT革命)の流れに乗って改革が叫ばれて、規制撤廃、自由化、グローバル化がキーワードとなりました。

改革には陽の部分と陰の部分があると思うのですが、陽の部分では、今の便利になった表面的には明るい平成が出来上がったこと。一方、陰の部分に目を向けると、本格的な格差社会の出發がここから始まっているように思われます。

平成7年いきなり阪神淡路大震災に見舞われました。当時、大阪と尼崎におり大きな被害こそ受けませんでした。後始末に追われました。災害多発の幕開けでした。

平成始めの混乱の中でも少子化は着々と進行しており、平成2年の出生率が1.57に低下して「1.57ショック」と呼ばれるようになり、国の少子化対策の一つの動機となりました。この年の高

齢化率：12.0。

平成の後半は地域人間入りした時代です。多くの会社は人々の一所懸命となる拠り所の地位を自ら捨て、代わりに地域の価値が相対的に高まってきた時代であったでしょう。

「隣は何をする人ぞ」であった私が比較的速やかに地域人間に変わったのは、自宅の火事や近くの宅地造成などでご近所の大切なことを知ったことと、熱心な誘いがあったことでしょう。

中越地震、中越沖地震と続けて地震が発生、現地で災害ボランティアの経験を積みました。追い打ちをかけて平成 23 年東日本大震災が発生、災害の世紀を強く印象付けました。

私が地域人間になって間もない平成 17 年には、出生率 1, 26 まで低下し、少子化は着々と進んでいました。高齢化率 20.1。

平成を振り返ってみると、国際的には冷戦終結、グローバル化、中国の台頭があり、新しい国際秩序を模索し始めた時代、国内ではバブル崩壊の混乱を構造改革なるもので乗り越えたように見えるが、根がより深いところにある少子高齢化社会、人口減少の時代に、更には災害の時代に入った混沌の時代といわれるのではないのでしょうか。

3. 時代と地域

改めて昭和と平成を振り返ってみると、昭和前半の戦争とその後始末の混乱の時代、後半の躍進・平和の時代、平成に入って膨張し過ぎた経済の破たんとその後始末の時代、そして構造改革なるものによる軟着陸の時代とに分けられるでしょう。

この間に地域に対する人々の意識が変わってきました。

昭和の地域は、前半の戦争遂行と戦後処理に使われた地域の時代があり、後半の躍進・平和の時代は、会社という組織が頼りにされる代わりに、そして前の戦争とその後始末の地域の反動もあって、地域が軽視されたといえる時代であったと思います。

平成の地域は、頼りにされた会社と人々が還るべき故郷が失われて、今住む地域が新しい故郷として再認識されてきた時代といえるでしょう。

またこの時代 IT 革命の大波にさらされた時代でした。大波が地域に及ぼした影響は無視できません。リアルな情報を直接個人にもたらすようになった IT 革命は、地域に表裏二面の影響を与えました。一面は情報源としての地域の存在を薄くさせると共にネット上での新しい人間関係を創り出しました。他の一面は人々の孤立化を進める結果となり、孤独死や子育ての孤立化等を齎し、人を結び付ける地域の大切さが再認識されたという二面性です。

その後の更なる高齢化の進行と共に災害多発、そして頼るべき行政の財政力が衰退して、地域が最も頼りにされ始めた現在とがあるのではないのでしょうか。

私が地域に関わりだした時代は、まさに平成の前者の地域再認識の時代と思います。そして今、地域が最も頼りにされ始めた時代に住民協が出発しました。

4. 新たな時代の課題

新たに迎える時代は、平成の混迷から脱け出して、新しい時代環境に適応していく時代です。そして地域が最も頼りにされる時代になると思います。

次の時代に引き継がれる日本の課題を三つ上げよといわれれば、国内では、◆少子高齢化（＝人生百年時代）、◆格差社会の広がり（＝貧困層の増加；特に高齢層の）、◆そして多発する災害への備え。一つ追加すれば、◆激変する国際環境への対応でしょうか。

その中で最も「持続可能な地域社会を形成する」のに重要で根が深い問題は少子高齢化です。昭和・平成で体験した事とは異なる次元の課題といえるのではないのでしょうか。

人の寿命が延びれば社会が高齢化していくことはすぐ理解できるが、少子化がなぜ起こるかは考えておく必要があると思います。多世代家族が存在し、家族で子どもを育て子どもが家族の次の世代を背負うという役割があった時代は、子どもが沢山あった方が歓迎されました。家族が核家族に代わってからはどうでしょうか。子どもを育てるのは夫婦だけとなる、共働きの時代となったが

育児環境は整えられていない、そこから生じる色々な負担の大きさ等々を考えると、沢山の子供を持たない時代背景があります。

日常生活の中で人口減少の影響はあまり実感されないのですが、すでに平成始めから将来必ず起こりうる課題として認識はされてきました(1.57ショック)。人口の中の若年層の比率が少なくなっていることを示す高齢化率という間接的な数字では、問題の本質である若年年齢層の減少が見過ごされてしまうことがあります。

一つの数字で示せば、50年後の日本の人口構成は、65歳以上4、20~64歳5、に対して19歳以下が1の割合です(国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より)。

少子化を改善していくには、一つ一つの社会的背景を認識し、対策していく忍耐強い国を始めとした行政的な施策が必須です。子育て環境の改善(孤立化、待機児童、多忙等)、教育費の負担の減少、住宅の問題等々、行政の最優先課題と位置付けられるでしょう。

足元の地域社会に戻れば、少子高齢化の内の高齢化「人生百年時代」より生じる色々な事象をいかに克服していくかが最大の課題でしょう。例えば、健康維持、生活維持、生活費の確保(格差の防止)、介護、孤立化、生きがい、困りごとの解決等々、大小さまざまです。

少子化が高齢化社会に与える影響の一つは、労働人口の減少、働き手が少なくなり特に介護を必要とする高齢者の増加に対して介護に携わる労働力が減少することです。国が地域包括ケアシステムを作成して、出来る限り高齢者が地域の中で生活していく施策を取り始めている今、老老介護

が必然の姿になっています。

労働力減少に対して、労働年齢の上昇と女性の就労が進められており、やがて年齢にこだわらない就労の時代が来ると考えています。外国人労働者の増加も現実となっています。

地域の活動の中心になる年齢層は、新しい就労環境の中で、現実には75歳から85歳位まで上がって来ます。そこで必要なことは、自分たちが社会の重要な役割を担っているという当事者としての自覚。高齢者層ではあるが、老人という語感で片づけてしまわれたい意識改革、そして高齢者層こそがITやAIを中心とした新しいテクノロジーを活用して、己の活動をサポートしていくことが必要なのではないのでしょうか。

それが結果として生きがいを生み健康寿命を向上させ、高齢者の格差を少なくすることに大いに関係して来るのではないかと思います。

地域が最も頼りにされる時代となった今、年代を問わず、少子化対策・高齢化対策、更に災害への備えを含めて、地域住民がお互いに気安く助け合っている環境を作っていくことが、全ての課題に向き合う出発点となるのではないのでしょうか。端的に申し上げれば、「互近助」の地域づくりが、新しい時代が求める地域づくりではないかと思っています。

(「互近助」とは、お互いさまの心で近所の人たちが助け合っていくこと、平常時も災害時も)

そして生きがいと安心を得る場として、住民協を中心としたコミュニティビジネス(或いはサービス)の存在が重要な役割を担うことになると思っています。

編集後記

将に、関東の正月は箱根駅伝で明ける、という感じでテレビにくぎ付けになりました。青山学院の5連覇を東海大学が崩したのは意外でしたが、競技後の評論を見聞きすると、それなりに優勝する下地はあったようです。嘗ての優勝常連校に代わって、東海大・青学大・東洋大が優勝を競うまでに成長するには、5年10年の長い助走期間があつてのことで、一朝一夕に出来上がった優勝ではない駅伝という競技の奥深さ、面白さを知りました。